

# かのように

森鷗外

青空文庫



朝小間使の雪が火鉢ひばちに火を入れに来た時、奥さんが不安らしい顔をして、「秀磨ひでまろの部屋にはゆうべも又電氣が附いていたね」と云った。

「おや。さようでございましたか。先つき瓦斯ガス煖炉だんろに火を附けにまいりました時は、明りはお消しになって、お床の中で煙草たばこを召し上がっていらつしやいました。」

雪はこの返事をしながら、戸を開けて自分が這入はいった時、大きい葉巻の火が、暗い部屋の、しんとしている中で、ぼうつと明るくなつては、又微かすかになつていた事を思い出して、折々あることではあるが、今朝もはつと思つて、「おや」と口に出そうであつたのを呑のみ込んだ、その瞬間の事を思い浮べていた。

「そうかい」と云つて、奥さんは雪が火を活いけて、大きい杵わく火鉢の中の、真つ白い灰を綺き麗れいに、盛り上げたようにして置いて、起たつて行くのを、やはり不安な顔をして、見送つていた。邸やしきでは瓦斯が勝手にまで使つてあるのに、奥さんは逆上のぼせると云つて、炭火に當つていたのである。

電燈やしきは邸ではどの寢間にも夜どおし附いている。しかし秀磨は寝る時必ず消して寝る習慣くわんを持つていたので、それが附いていれば、又徹夜して本を読んでいたと云うことが分か

る。それで奥さんは手水ちようずに起きる度たびに、廊下から見て、秀麿のいる洋室の窓すきの隙から、火の光の漏れるのを気にしているのである。

秀麿は学習院から文科大学に這入って、歴史科で立派に卒業した。卒業論文には、国史は自分が畢生ひっせいの事業として研究する積りでいるのだから、苛いやしくも筆を著つけたくないと云って、古代印度史インドの中から、「迦膩色迦王かにしかおうと仏典ぶつてん結集けつじゅう」と云う題を選んだ。これは阿輸迦王あしうおうの事はこれまで問題になつていて、この王の事がまだ研究してなかつたからである。しかしこれまで特別にそう云う方面の研究をしていたのでないから、秀麿は一步一步非常な困難どうちやくに撞ぶつ著ちやくして、どうしてもこれはサンスクリットをまるで知らないでは、正確な判断は下されないと考えて、急に高楠博士たかくすはくしの所へ駈かけ附けて、梵語研究ぼんごの手ほどきをして貰った。しかしこう云う学問はなかなか急きゆう拵しらえに出来る筈はずのものでないから、少しづつ分かつて来れば来る程、困難を増すばかりであつた。それでも屈せず、選んだ問題だけは、どうにかこうにか解決を附けた。自分ではひどく不満足に思っているが、率直な、

一切の修飾を却けた秀麿の記述は、これまでの卒業論文には余り類がないと云うことであつた。

丁度この卒業論文問題の起つた頃からである。秀麿は別に病氣はないのに、元氣がなくなつて、顔色が蒼く、目が異様に赫いて、これまでも多く人に交際をしない男が、一層社交に遠ざかつて来た。五条家では、奥さんを始として、ひどく心配して、医者に見せようとしたが、「わたくしは病氣なんぞはありません」と云つて、どうしても聴かない。奥さんは内証で青山博士が来た時尋ねてみた。青山博士は意外な事を問われたと云うような顔をしてこう云つた。

「秀麿さんですか。診察しなくちや、なんとも云われませんね。ふん。そうですか。病氣はないから、医者には見せないと云うのでしたつて。そうかも知れません。わたくしなんぞは学生を大勢見ているのですが、少し物の出来る奴が卒業する前後には、皆あんな顔をしていきますよ。毎年卒業式の時、側で見えますが、お時計を頂戴しに出て来る優等生は、大抵秀麿さんのような顔をしていて、卒倒でもしなければ好いと思う位です。も少しで神経衰弱になると云うところで、ならず済んでいるのです。卒業さえしてしまえば直ります。」

奥さんもなる程そうかと思つて、強いて心配を押さえ附けて、今に直るだろう、今に直るだろうと、自分で自分に暗示を与えるように努めていた。秀磨が目の前にいない時は、青山博士の言つた事を、一句一句繰り返して味つてみて、「なる程そうだ、なんの秀磨に病氣があるものか、大丈夫だ、今に直る」と思つてみる。そこへ秀磨が蒼い顔をして出て来て、何か上の空で言つて、跡は黙り込んでしまう。こつちから何か話し掛けると、実の入つていないような、責を塞ぐような返事を、詞の調子だけ優しくしてする。なんだか、こつちの詞は、子供が銅像に吹矢を射掛けたように、皮膚から弾き戻されてしまうような心持がする。それを見ると、切角青山博士の詞を基礎にして築き上げた楼閣が、覚束なくぐらついて来るので、奥さんは又心配をし出すのであった。

秀磨は卒業後直に洋行した。秀磨と大した点数の懸隔もなくて、優等生として銀時計を頂戴した同科の新学士は、文部省から派遣せられる筈なのに、現にヨオロッパにいる一人が帰らなくて、経費が出ないので、それを待つているうちに、秀磨の方は当主の五条子

爵が先へ立たせてしまった。子爵は財政が割合に豊かなので、嫡子ちやくしに外国で学生並の生活させる位の事には、さ程困難を感じないからである。

洋行すると云うことになつてから、余程元氣附いて来た秀磨が、途中からよこした手紙も、ベルリンに著ついてからのものも、総すべての周囲の物に興味を持っていて書いたものらしく見えた。印度インドの港うおで魚うおのように波の底に潜くぐつて、銀錢を拾う黒ん坊の子供の事や、ポルトセエドで上陸して見たと云う、ステレオタイプな笑顔の女芸人が種々の楽器を奏する国際的団体の事や、マルセイユで始て西洋の町を散歩して、嘘と云うものを衝つかぬ店で、掛値と云うもののない品物を買つて、それを持つて帰ろうとして、紳士がそんな物をぶら下げてお歩きにならなくても、こちらからお宿へ届けると云われ、頼んで置いて帰つてみると、品物が先へ届いていた事や、それからパリイに滞在していて、或る同族の若殿に案内せられてオペラを見に行つた時、フォアイエエで立派な貴夫人が来てなん何か云うと、若殿がつつけんどんに、わたし共はフランス語は話しませんと云つて置いて、自分が呆あきれた顔をしたのを見て女に聞えたかと思う程大きい声をして、「Tout 《ツウ》 ce 《シヨ》 qui 《キイ》 brille 《ブリユ》, nest 《ネエ》 pas or」と云つたので、始てなる程と悟つた事や、それからベルリンに著いた当時の印象を瑣細ささいな事まで書いてあつて、子爵夫婦を面白がらせた。

子爵は奥さんに三省堂の世界地図を一枚買って渡して、電報や手紙が来る度に、鉛筆で点を打ったり線を引いたりして、秀磨はここに著いたのだ、ここを通っているのだと言って聞かせた。

ヨオロッパではベルリンに三年いた。その三年目がエーリヒ・シュミット総長もとの下に、大学の三百年祭をする年に当たったので、秀磨も鐔つばの嵌はまった松たいまつ明まつを手にとって、松明行列の仲間に這入って、ベルリンの町を練って歩いた。大学にいる間、秀磨はこの期にはこれこれの講義を聴くと云うことを、精くわしく子爵の所へ知らせてよこしたが、その中にはイタリヤ復興時代だとか、宗教革新の起原だとか云うような、歴史その物の講義と、史的研究の原理と云うような、抽象的な史学の講義とがあるかと思うと、民族心理学やら神話成立やらがある。プラグマチスムスの哲学史上の地位と云うのがある。或る助教授の受け持っているフリードリヒ・ヘッベルと云う文芸史方面のものがある。ずっと飛び離れて、神学科の寺院史や教義史がある。学期ごとにこんな風で、専門の学問に手を出した事のない子爵には、どんな物だか見当の附かぬ学科さえあるが、とにかく随分雑ざつぱく駁はくな学問のしようをしているらしいと云う事だけは判断が出来た。しかし子爵はそれを苦にもしない。息子を大学に入れたり、洋行をさせたりしたのは、何も専門の職業がさせたいからの事では



ない。追つて家督相続をさせた後に、恐多いが皇室の藩屏はんぺいになって、身分相応な働きをして行くのに、基礎になる見識があつてくれれば好い。その為ために普通教育より一段上の教育を受けさせて置こうとした。だから本人の気の向く学科を、勝手に選んでさせて置いて好いと思つていたのであつた。

ベルリンにいる間、秀麿が学者の噂うわさをしてよこした中に、エエリヒ・シユミットの文才や弁説も度々褒ほめてあつたが、それよりも神学者アドルフ・ハルナツクの事業や勢力がどんなものだと云うことを、繰り返してお父うさんに書いてよこしたのが、どうも特別な意味のある事らしく、帰つて顔を見て、土産話みやげばなしにするのが待ち遠いので、手紙でお父うさんに飲み込ませたいとでも云うような熱心が文章の間に見えていた。殊ことに大学の三百年祭の事を知らせてよこした時なんぞは、秀麿はハルナツクをこの目覚ましい祭の中心人物として書いて、ウイルヘルム第二世とハルナツクとの君臣の間柄は、人主が学者を信用し、学者が献身的態度を以もつて学术界に貢献しながら、同時に君国の用をなすと云う方面から見ると、模範的だと云つて、ハルナツクが事業の根柢こんていをはつきりさせる為めに、とうとう父テオドジウスの事にまで溯さかのぼつて、精くわしく新教神学発展の跡あとを辿つて述べていた。自分の専門だと云つている歴史の事に就いても、こんなに力を入れて書いてよこしたことはない

のに、どうしてハルナツクの事ばかりを、特別に言つてよこすのだろうと子爵は不審に思つて、この手紙だけ念を入れて、度々読み返して見た。そしてその手紙の要点を掴まえようと努力した。手紙の内容を約めて見れば、こうである。政治は多数を相手にした為事である。それだから政治をするには、今でも多数を動かしている宗教に重きを置かなくてはならない。ドイツは内治の上では、全く宗教を異にしている北と南とを擣きくるめて、人心の帰嚮を繰つて行かなくてはならないし、外交の上でも、いかに勢力を失墜していると云え、まだ深い根柢を持つているロオマ法王を計算の外に置くことは出来ない。それだからドイツの政治は、旧教の南ドイツを逆わないように抑えていて、北ドイツの新教の精神で、文化の進歩を謀つて行かなくてはならない。それには君主が宗教上の、しっかりした基礎を持つていなくてはならない。その基礎が新教神学に置いてある。その新教神学を現に代表している学者はハルナツクである。そう云う意味のある地位に置かれたハルナツクが、少しでも政治の都合の好いように、神学上の意見を曲げているかと云うに、そんな事はしていない。君主もそんな事をさせようとはしていない。そこにドイツの強みがある。それでドイツは世界に羽をのして、息張つていことが出来る。それで今のような、社会民政党の跋扈している時代になつても、ウイルヘルム第二世は護衛兵も連れずに、侍従武

官と自動車に相乗をして、ぷつぷと喇叭らっばを吹かせてベルリン中を駈け歩いて、出し抜に展覽会を見物しに行ったり、店へ買物をしに行ったりすることが出来るのである。ロシアとでも比べて見るが好い。グレシア正教の寺院を沈滞のままに委まかせて、上辺うわべを真綿にくるむようにして、そつとして置いて、黔首けんしゅを愚ぐにするとでも云いたい政治をしている。その愚にせられた黔首が少しでも目を醒さますと、極端な無政府主義者になる。だからツアアルは平服へいふくを著きた警察官が垣を結つたように立っている間でなくては歩かれないのである。一体宗教を信ずるには神学はいらぬ。ドイツでも、神学を修めるのは、牧師になるため、ちよつと思つと、宗教界に籍を置かないものには神学は不用なように見える。しかし学問などをしない、智力の発展していない多数に不用なのである。学問をしたものには、それが有用になつて来る。原がんらい来学問をしたものには、宗教家の謂いう「信仰」は無い。そう云う人、即すなわち教育があつて、信仰のない人に、単に神を尊敬しろ、福音ふくいんを尊敬しろと云つても、それは出来ない。そこで信仰しないと同時に、宗教の必要をも認めなくなる。そう云う人は危険思想家である。中には實際は危険思想家になつていながら、信仰のないのに信仰のある真似をしたり、宗教の必要を認めないのに、認めている真似をしている。實際この真似をしている人は随分多い。そこでドイツの新教神学のような、教義や寺院の歴史

をしつかり調べたものが出来ていると、教育のあるものは、志さえあれば、専門家の綺麗に洗い上げた、滓かすのこびり付いていない教義をも覗のぞいて見ることが出来る。それを覗いて見ると、信仰はしないまでも、宗教の必要だけは認めるようになる。そこで穩健な思想家が出来た。ドイツにはこう云う立脚地を有している人の数がなかなか多い。ドイツの強みが神学に基づいていると云うのは、ここにある。秀磨はこう云う意味で、ハルナツクの人物を称しょうさん讚さんしている。子爵にも手紙の趣意はおおよそ呑み込めた。

西洋事情や輿地誌略よちりやくの盛んに行われていた時代に人となつて、翻訳書で当用を弁ずることが出来、華族仲間で口が利かれる程度に、自分を養成しただけの子爵は、精神上の事は、朱子しゆしの註ちゆうに拠よつて論語を講釈するのを聞いたより外、なんの智識もないのだが、頭のいい人なので、これを読んだ後に内々ないない自ら省かえりみて見た。倅せがれの手紙にある宗教と云うのはクリスト教で、神と云うのはクリスト教の神である。そんな物は自分とは全く没交渉である。自分の家には昔から菩提所ぼだいじよに定さだまっている寺があった。それを維新の時、先代が殆ど縁を切つたようにして、家の葬祭を神官に任せてしまった。それからは仏と云うものとも、全く没交渉になつて、今は祖先の神靈と云うものより外、認めていない。現に邸内ていないにも祖先を祭つた神社だけはあつて、鄭てい重ちゆうな祭をしている。ところが、その祖先の神

霊が存在していると、自分は信じているだろうか。祭をする度に、祭るに在いますが如くすと云う論語の句が頭に浮ぶ。しかしそれは祖先が存在していられるように思つて、お祭をしないでならないと云う意味で、自分を顧みて見るに、實際存在していられると思うのではないらしい。いられるように思うのでもないかも知れない。いられるように思おうと努力するに過ぎない位ではあるまいか。そうして見ると、倅いの謂う、信仰がなくて、宗教の必要だけを認めると云う人の部類に、自分は這入つているものと見える。いやいや。そうではない。倅の謂うのは、神学でも覗いて見て、これだけの教義は、信仰しないまでも、必要を認めなくてはならぬと、理性で判断した上で認めることである。自分は神道の書物などを覗いて見たことはない。又自分の覗いて見られるような書物があるか、どうだか、それさえ知らずにいる。そんならと云つて、教育のない、信仰のある人が、直覺的に神靈の存在を信じて、その間になんの疑をも挿さしはさまないのとも違うから、自分の祭をしているのは形式だけで、内容がない。よしや、在いますが如く思おうと努力していても、それは空虚な努力である。いやいや。空虚な努力と云うものはありようがない。そんな事は不可能である。そうして見ると、教育のない人の信仰が遺伝して、微かすかに残つていても思わなくてはなるまい。しかしこれは倅の考えるように、教育が信仰を破壊すると云うことを認め



持していようが、いつになったら滅亡してしまおうが、そんな事には頓とん著ちやくしないのであるまいか。自分が信ぜない事を、信じているらしく行つて、虚偽だと思つて疚やましがりもせず、それを子供に教えて、子供の心理状態がどうなろうと云うことさえ考えてもみないのではあるまいか。倅は信仰はなくても、宗教の必要を認めると云うことを言っている。その必要を認めなくてはならないと云うこと、その必要を認める必要を、世間の人は思つても見ないから、どうしたら神話を歴史だと思わず、神霊の存在を信ぜずに、宗教の必要が現在に於おいて認めていられるか、未来に於いて認めて行かれるかと云うことなんぞを思つて見ようもなく、一切無頓著でいるのではあるまいか。どうも世間の教育を受けた人の多数は、こんな物ではないかと推察せられる。無論この多数の外に立つて、現今の頽たい勢せいを挽回ばんかいしようとしている人はある。そう云う人は、倅の謂う、単に神を信仰しろ、福音を信仰しろと云う類たぐいである。又それに雷同している人はある。それは倅の謂う、真似をしてい人である。これが頼みになろうか。更に反対の方面を見ると、信仰もなくしてしまひ、宗教の必要をも認めなくなつてしまつて、それを正直に告白している人のあることも、或る種類の人の言論ちよんに徴ちようして知ることが出来る。倅はそう云う人は危険思想家だと云つてゐるが、危険思想家を嗅かぎ出すことに骨を折つてゐる人も、こつちでは存外そこまでは氣

が附いていないらしい。実際こつちでは、治安妨害とか、風俗壊乱とか云う名目の下に、そんな人を羅致した実例を見たことがない。しかしこう云うことを洗立あらいだてをして見た所が、確とした結果を得ることはむずかしくはあるまいか。それは人間の力の及ばぬ事ではあるまいか。若しそうだと、その洗立をするのが、世間の無頓著よりは危険ではあるまいか。倅もその危険な事に頭を衝つ込んでいるのではあるまいか。倅は専門の学問をしているうちに、ふとそう云う問題に触れて、自分も不安になったので、己に手紙をよこしたかも知れぬ。それともこの問題にひどく重きを置いているのだろうか。

五条子爵は秀麿の手紙を読んでから、自己を反省したり、世間を見渡したりして、ざっとこれだけの事を考えた。しかしそれに就いて倅と往復を重ねた所で、自分の満足するだけの解決が出来そうにもなく、倅の帰つて来る時期も近づいているので、それまで待つても好いと思つて、返信は別に宗教問題なんぞに立ち入らずに、只委細承知した、どうぞなるべく穏健な思想を養つて、国家の用に立つ人物になつて帰つてくれとしか云つて遣らなかつた。そこで秀麿の方でも、お父うさんにどれだけ自分の言つた事が分かつたか知らずにいた。

秀麿は平生丁度その時思っている事を、人に話して見たり、手紙で言つて遣つて見たり



するが、それをその人に是非十分飲み込ませようともせず、人を自説に転ぜさせよう、服させようともしない。それよりは話す間、手紙を書く間に、自分で自分の思想をはつきりさせて見て、そこに満足を感じる。そして自分の思想は、又新しい刺戟しげきを受けて、別な方面へ移つて行く。だからあの時子爵が精しい返事を遣つたところで、秀麿はもう同じ問題の上で、お父うさんの満足するような事を言つてはよこさなかつたかも知れない。

洋行をさせる時健康を氣遣つた秀麿が、旅に出ると元氣になつたらしく、筆まめに書いてよこす手紙にも生々した様子が見え、ドイツで秀麿と親しくしたと云つて、歸つてから尋ねて来る同族の人も、秀麿は随分勉強をしているが、玉も衝けば氷こおりすべ滑りもすると云う風で、上流の人を相手にして開いている、某夫人のパンジオナートでは、若い男女の寄宿人が、芝居の初興行をでも見に行くとき、ヴィコント五条が一しよでなくては面白くないと云う程だと話して聞せるので、子爵夫婦は喜んで、早く丈夫な男になつて歸つて来るのを見たいと思つていた。

秀麿は去年の暮に、書物をむやみに沢山持つて、帰つて来た。洋行前にはまだどこやら少年らしい所のあつたのが、三年の間にすっかり男らしくなつて、血色も好くなり、肉も少し附いている。しかし待ち構えていた奥さんが氣を附けて様子を見ると、どうも物の言い振いぶりが面白くないように思われた。それは大学を卒業した頃から、西洋へ立つ時までの、何か物を案じていて、好い加減に人に応対していると云うような、沈黙勝な会話振が、定めてすっかり直つて歸つたことと思つていたのに、歸つた今もやはり立つ前と同じように思われたのである。

新橋へ著ついた日の事であつた。出迎をした親類や心安い人の中うちには、邸まで附いて来たのもあつて、五条家ではそう云う人達に、一寸ちよつとした着さかなで酒を出した。それが済んだ跡で、子爵と秀麿との間に、こんな對話があつた。

子爵は袴はかまを着けて据わつて、刻煙草きざみたばこを煙管きせるで飲んでいたが、瘦やせた顔の目の縁に、皺しわを沢山寄せて、嬉しげに息子をじつと見て、只一言「どうだ」と云つた。

「はい」と父の顔を見返しながら秀麿は云つたが、傍そばで見ている奥さんには、その立派な洋服姿が、どうも先さつき客の前で勤めていた時と変らないように、少しも寛くつろいだ様子がないように思われて、それが氣に掛かつた。

子爵は息子がまだ何か云うだろうと思つて、暫く黙っていたが、それきりなんとも云わないので、詞を続いだ。「書物を沢山持つて帰つたそうだね。」

「こつちで為事をするのに差支えないようにと思つて、中には読んで見る方の本でない、物を捜し出す方の本も買つて帰つたものですから、嵩が大きくなりました。」

「ふん。早く為事に掛かりたかろうなあ。」

秀麿は少し返事に躊躇するらしく見えた。「それは舟の中でも色々考えてみました。が、どうも当分手が著けられそうもないのです。」こう云つて、何か考えるような顔をしている。

「急ぐ事はない。お前のは売らなくてはならんと云うのでもなし、学位が欲しいと云うのでもないからな。」一旦こうは云つたが、子爵は更に、「学位は貰つても悪くはないが」と言い足して笑つた。

ここまで傍聴していた奥さんが、待ち兼ねたように、いろいろな話をし掛けると、秀麿は優しく受答をしていた。この時奥さんは、どうも秀麿の話は氣乗がしていない、附合に物を言っているようだと言ふ第一印象を受けたのであつた。

それで秀麿が座を立つた跡で、奥さんが子爵に言つた。「体は大層好くなりましたが、

なんだかこう控え目に、考え考え物を言うようではございませんか。」

「それは大人おとなになったからだ。男と云うものは、奥さんのように口から出任せに物を言つてはいけないのだ。」

「まあ。」奥さんは目を睜みはつた。四十代が半分過ぎているのに、まだぱっちりした、可哀かわいらしい目をしている女である。

「おこつてはいけない。」

「おこりなんかしませんわ。」と云つて、奥さんはちよいと笑つたが、秀麿の返事より、この笑の方が附合らしかった。

その時からもう一年近く立っている。久し振の新年も迎えた。秀麿は位階があるので、お父う様程忙しくはないが、幾分か儀式らしい事もしなくてはならない。新調させた礼服を著て、不精らしい顔をせず、それを済ませた。「西洋のお正月はどんなだつたえ」とお母あ様が問うと、秀麿は愛想好く笑う。「一向駄目ですね。学生は料理屋へ大晦日おおみそかの

晩から行つていまして、ボオレと云つて、シャンパンに葡萄酒ぶどうしゆに砂糖に炭酸水と云うように、いろいろ交ぜて温めて、レモンを輪切にして入れた酒こしらを拵こしらえて夜なかになるのを待つています。そして十二時の時計が鳴り始めると同時に、さあ新年だと云うので、その酒つを注さかいだ杯かずきをてんでんに持つて、こつこつ打ち附けて、プロジツト・ノイヤアルと大声で呼んで飲むのです。それからふざけながら町を歩いて帰ると、元日には寝ひるていて、午まで起きはしません。町でも家は大抵戸うちを締めて、ひっそりしています。まあ、クリスマスにお祭らしい事はしてしまつて、新年の方はお留守になつていようなわけです」と云う。

「でもお上かみのお儀式はあるだろうね。」「それはございますそうです。拝賀が午後二時だとか云うことでした。」「こんな風に、何事につけても人が問えば、ヨオロッパの話もするが、自分から進んで話すことはない。

二三月の一番寒い頃も過ぎた。お母様が「向うはこんな事ではあるまいね」と尋ねて見た。「それはグラツトアイスと云つて、寒い盛りに一寸ちよつと温かい晩があつて、積つた雪うわどけが融とけをして、それが朝氷つていることがあります。木の枝は硝子ガラスで包んだようになつています。ベルリンのウンテル・デン・リンデンと云う大通りの人道が、少し凸凹でこぼこのある鏡かみのようになつていて、滑つて歩くことが出来ないの、人足すなが沙すなを入れた籠かごを腋わきに抱

えて、蒔まいて歩いていきます。そう云う時が一番寒いのですが、それでもロシアのように、町を歩いていて鼻が腐るような事はありません。煖炉のない家もないし、毛皮を著ない人もない位ですから、寒さが体には徹こたえません。こちらでは夏座敷に住んで、夏の支度をして、寒がつているようなものですね。」秀磨はこんな話をした。

桜の咲く春も過ぎた。お母あ様に桜の事を問われて、秀磨は云った。「ドイツのような寒い国では、春が一どきに来て、どの花も一しよに咲きます。美しい五月と云う詞があります。桜の花もないことはありませんが、あつちの人は桜と云う木は桜ん坊のなる木だとばかり思っていますから、花見はいたしません。ベルリンから半はん道みちばかりの、ストララウと云う村に、スプレエ川の岸で、桜の沢山植えてある所があります。そこへ日本から行っている学生が揃そろつて、花見に行つたことがありますよ。絨じゆうたん緞たんを織る工場の女工なんぞが通り掛かつて、あの人達は木の下で何をしているのだろうと云つて、驚いて見ていました。」

暑い夏も過ぎた。秀磨はお母あ様に、「ベルリンではこんな日にどうしているの」と問われて、暫く頭を傾けていたが、とうとう笑いながら、こう云った。「一番つまらない季節ですね。誰も彼も旅行してしまいます。若い娘なんぞがスウィツルに行つて、高い山

に登ります。跡に残っている人は為方しかたがないので、公園内の飲食店で催す演奏会へでも往つて、夜なかまで涼みます。だいぶ北極が近くなっている国ですから、そんなにして遊んで帰つて、夜なかを過ぎて寝ようとすると、もう窓が明るくなり掛かっています。」

かれこれするうちに秋になった。「ヨオロッパでは寒さが早く来ますから、こんな秋あきび日和よりの味は味うことが出来ませんね」と、秀磨は云つて、お母あ様に対して、ちよつと愉快げな笑顔をして見せる。大抵こんな話をするのは食事の時位で、その外の時間には、秀磨は自分の居間になつてゐる洋室に籠こもつてゐる。西洋から持つて来た書物が多いので、本箱なんぞでは間に合わなくなつて、この一間だけ壁に悉く棚ことごとたなを取り附けさせて、それへ一ぱい書物を詰め込んだ。棚の前には薄い緑色の幕を引かせたので、一種の装飾にはなつたが、壁がこれまでの倍以上の厚さになつたと同じわけだから、室内が余程暗くなつて、それと同時に、一間が外より物音の聞えない、しんとした所になつてしまつた。小春の空が快く晴れて、誰も彼も出歩く頃になつても、秀磨はこのしんとした所に籠こもつて、卓テエブルの傍を離れずに本を読んでいる。窓の明りが左手から斜ななめに差し込んで、緑の羅紗ろしゃの張つてある上を半分明るくしている卓である。

この秋は暖い暖いと云っているうちに、稀まれに降る雨がいつか時雨しぐれめいて来て、もう二三日前から、秀麿の部屋のフウベン形の瓦斯ガス煖炉だんろにも、小間使の雪が来て点火することになつている。

朝起きて、庭の方へ築つき出してある小さいヴェランダへ出て見ると、庭には一面に、大きい黄いろい梧桐ごじょうの葉と、小さい赤い山もみじの葉とが散らばつて、ヴェランダから庭へ降りる石段の上まで、殆ど隙間もなく彩いろどつている。石垣に沿うて、露に濡ぬれた、老ろう緑りよくの広葉を茂らせている八角やっ全盛でが、所々に白い茎を、枝のある燭しよく台だいのように抽ぬき出して、白い花を咲かせている上に、薄曇の空から日光が少し漏れて、雀すずめが二三羽鳴きながら飛び交わしている。

秀麿は暫く眺めていて、両手を力なく垂れたままで、背を反そらせて伸びをして、深い息を衝いた。それから部屋に這はい入つて、洗面卓たたくの傍そばへ行つて、雪が取つて置いた湯を使つて、背広の服を引つ掛けた。洋行して帰つてからは、いつも洋服きを着ているのである。

そこへお母あ様が這入つて来た。「きようは日曜だから、お父う様は少しゆっくりして



いらつしやるのだが、わたしはもう御飯を戴くから、お前もおいででないか。」こう云つて、息子の顔を横から覗くように見て、詞を続けた。「ゆうべも大層遅くまで起きていましたね。いつも同じ事を言うようですが、西洋から帰つてお出の時は、あんなに体が好かつたのに、余り勉強ばかりして、段々顔色を悪くしておしまいなね。」

「なに。体はどうもありません。外へ出ないでいるから、日に焼けないのでしよう。」笑いながら云つて、一しよに洋室を出た。

しかし奥さんにはその笑声が胸を刺すように感ぜられた。秀麿が心からでなく、人に目潰しに何か投げ附けるように笑声をあびせ掛ける習癖を、自分も意識せず、いつの間にか養成しているのを、奥さんは本能的に知っているのである。

食事をしまつて帰つた時は、明方に薄曇のしていた空がすっかり晴れて、日光が色々に邪魔をする物のある秀麿の室を、物見高い心から、依怙地に覗こうとするように、窓帷のへりや書棚のふちを彩つて、卓の上に幅の広い、明るい帯をなして、インク壺を光らせたり、床に敷いてある絨氈の空想的な花模様、刹那の性命を与えたりしている。そんな風に、日光の差し込んでゐる処の空気は、黄いろに染まり掛かった青葉のような色をして、その中には細かい塵が躍っている。

室内の温度の余り高いのを喜ばない秀麿は、煖炉のコックを三分一程閉じて、葉巻を銜くわえて、運動椅子に身を投げ掛けた。

秀麿の心理状態を簡単に説明すれば、無聊ぶりように苦んでいると云うより外はない。それも何事もすることの出来ない、低い刺戟に饑うえている人の感ずる退屈とは違う。内に眠っている事業に圧迫せられるような心持である。潜勢力の苦痛である。三国時代の英雄は髀ひに肉を生じたのを見て歎たんじた。それと同じように、余所目よそめには痩せて血色の悪い秀麿が、自己の力を知覚していて、脳髓が医者い者の謂いう無動作性萎縮いしゆくに陥おいらねば好いがと憂うれえている。そして思量の体操をする積りで、哲学の本なんぞを読み耽ふけっているのである。お母あ様程には、秀麿の健康状態に就いて悲観ひしていない父の子爵が、いつだったか食事の時息子を顧かみて、「一肚皮いちとひじぎ時宜じぎに合わずかな」と云って、意味ありげに笑った。秀麿は例の笑顔を顔かたに湛たえて、「僕は不平家ではありません」と答えた。どうもお父う様はこつちが極端な自由思想をでも持つていはしないかと疑うっているらしい。それは誤解である。しかしさすが男親だけにお母あ様よりは、切実に少くもこつちの心理状態の一面を解ときしてきているようだと、秀麿は思った。

秀麿は父の詞ことばを一つ思い出したのが機縁き縁になって、今一つの父の詞を思い出した。それ

は又或る日食事をしている時の事で「どうも人間が猿から出来たなんぞと思つていられては困るからな」と云つた。秀麿はぎくりとした。秀麿だつて、ヘッケルのアントロポゲニイに連署して、それを自分の告白にしても好いとは思つていない。しかしお父う様のこの詞の奥には、こつちの思想と相容れない何物かが潜んでいるらしい。まさかお父う様だつて、草昧そうまいの世に一国民の造つた神話を、そのまま歴史だと信じてはいられまいが、うかと神話が歴史でないと云うことを言明しては、人生の重大な物の一角が崩れ始めて、船底の穴から水の這入るように物質的思想が這入つて来て、船を沈没させずには置かないと思つていられるのではあるまいか。そう思つて知らず識しらず、頑がん冥めいな人物や、仮面かむを被つた思想家と同じ穴に陥いつていられるのではあるまいかと、秀麿は思つた。

こう思うので、秀麿は父の誤解を打ち破ろうとして進むことを躊躇ちゅうちゆしている。秀麿が為めには、神話が歴史でないと云うことを言明することは、良心の命ずるところである。それを言明しても、果物が堅実な核さねを蔵くらしているように、神話の包かんでいる人生の重要な物は、保護して行かれると思つている。彼を承認して置いて、此これを維持して行くのが、学者の務つとめだと云うばかりではなく、人間の務つとめだと思つている。

そこで秀麿は父と自分との間に、狭くて深い谷があるように感ずる。それと同時に、父

が自分と話をする時、危険な物の這入っている疑のある箱の蓋を、そつと開けて見ようとしては、その手を又引つ込めてしまうような態度に出るのを見て、齒痒いようにも思い、又気の毒だから、いたわつて、手を出させずに置かなくてはならないようにも思う。父が箱の蓋を取つて見て、白昼に鬼を見て、毒でもなんでもない物を毒だと思つて怖れるよりは、箱の内容を疑わせて置くのが、まだしもの事かと思う。

秀麿のこう思うのも無理は無い。明敏な父の子爵は秀麿がハルナツクの事を書いた手紙を見て、それに対する返信を控えて置いた後に、寝られぬ夜などには度々宗教問題を頭の中で繰り返して見た。そして思えば思う程、この問題は手の附けられぬものだと言ふ意見に傾いて、随つてそれに手を著けるのを危険だとみるようになった。そこでとにかく倅にそんな問題に深入をさせたくない。なるう事なら、倅の思想が他の方面に向くようにしたい。そう思うので、自分からは宗教問題の事などは決して言い出さない。そしてこの問題が倅の頭にどれだけの根を卸しているかとあやぶんで、窃に様子を覗うようにしているのである。

秀麿と父との対話が、ヨオロッパから帰つて、もう一年にもなるのに、とかく対陣している両軍が、双方から斥候を出して、その斥候が敵の影を認める度に、遠方から射撃し

て還かえるように、はかばかしい衝突もせぬ代りに、平和に打ち明けることもなくしているのは、  
 こう云うわけである。

秀磨の銜くわえている葉巻の白い灰が、だいぶ長くなつて持つていたのが、とうとう折れて、  
 運動椅子に倚より掛かつている秀磨のチョッキの上に、細い鱗うろこのような破片を留とめて、絨じゆう  
 緞たんの上に落ちて砕けた。今のようになにもせずにいると、秀磨はいつも内には事業の圧迫  
 と云うような物を受け、外には家庭の空気の或る緊張を覚えて、不快である。

秀磨は「又本を読むかな」と思った。兼ねて生涯の事業にしようと思つた本国の歴史を  
 書くことは、どうも神話と歴史との限界をはつきりさせずには手が著けられない。寧むしろ先  
 ず神話の結成を学問上に綺麗に洗い上げて、それに伴う信仰を、教義史体にはつきり書き、  
 その信仰を司祭的に取り扱つた機関を寺院史体にはつきり書く方が好きそうだ。そうした  
 つてプロテスタント教がその教義史と寺院史とで毀損きそんせられないと同じ事で、祖先崇拜の  
 教義や機関も、特にそのために危害を受ける筈はずはない。これだけの事を完成するのは、極きわめ  
 て容易だと思つと、もうその平明な、小ざつぱりした記載を目の前に見るような気がする。  
 それが済んだら、安心して歴史に取り掛られるだろう。しかしそれを敢あえてする事、その目  
 に見えている物を手に取る事を、どうしても周囲の事情が許しそうにないと言ふ認識は、

ベルリンでそろそろ故郷へ帰る支度に手を著け始めた頃から、段々に、或る液体の中に浮んだ一点の塵を中心にして、結晶が出来て、それが大きくなるように、秀麿の意識の上に形づくられた。これが秀麿の脳髓の中に蟠結している暗黒な塊で、秀麿の企てている事業は、この塊に礙げられて、どうしても発展させるわけにいかないのである。それで秀麿は製作的方面の脈管を総て塞いで、思量の体操として本だけ読んでいる。本を読み出すと、秀麿は不思議に精神をそこに集注することが出来て、事業の圧迫を感じず、家庭の空氣の緊張をも感ぜないでいる。それで本ばかり読んでいることになるのである。

「又本を読むかな」と秀麿は思った。そして運動椅子から身を起した。

丁度その時こつこつと戸を叩いて、秀麿の返事をするのを待って、雪が這入って来た。小さい顔に、くりくりした、漆のように黒い目を光らして、小さくて鋭く高い鼻が少し仰あ向おもいているのが、ひどく可哀らしい。秀麿が帰った当座、雪はまだ西洋室で用をしたことがなかったので、開けた戸を、内からしやがんで締めて、絨緞の上に手を衝いて物を言った。秀麿は驚いて、笑顔をして西洋室での行儀を教えて遣った。なんでも一度言っただけで聞かせると、しっかり覚えて、その次の度からは慣れたものようにするのである。

暖炉を背にして立って、戸口を這入った雪を見た秀麿の顔は晴やかになった。エロチツ

クの方面の生活のまるで瞑ねむっている秀麿が、平和ではあつても陰気なこの家で、心から爽そ快うかいを覚えるのは、この小さい小間使を見る時ばかりだと云つても好い位である。

「綾小路さんがいらつしやいました」と、雪は籠かごの中の小鳥が人を見るように、くりくりした目の瞳ひとみを秀麿の顔に向けて云つた。雪は若檀わかだんな様に物を言う機会が生ずる度に、胸の中で凱歌がいかの聲が起る程、無意味に、何の欲望もなく、秀麿を崇拜びやうとしているのである。

この時雪の締めて置いた戸を、廊下の方からあらしく開けて、茶の天鷲びやうと絨の服を着た、秀麿と同年度の男が、駆け込むように這入つて来て、いきなり雪の肩を、太った赤い手で押えた。「おい、雪。若檀那の顔ばかり見ていて、取次をするのを忘れては困るじゃないか。」

雪の顔は真つ赤になつた。そして逃げるように、黙つて部屋を出て行つた。綾小路の方は振り返つてもみなかつたのである。

秀麿の眉間みげんには、注意して見なくては見えない程の皺しわが寄つたが、それが又注意して見ても見えない程早く消えて、顔の表情は極真ごくまじめ面目になつている。「君つまらない笑しょうだん談は、僕の所でだけはよしてくれ給え。」

「劈頭へきとう第一に小言を食わせるなんぞは驚いたね。氣持の好い天氣だぜ。君の内の親玉な

んぞは、秋晴とかなんとか云うのだろう。尤もセゾンはもう冬かも知れないが、過渡時代には、冬の日になったり、秋の日になったりするのだ。きようはまだ秋だとして置くね。どこか底の方に、ぴりつとした冬の分子が潜んでいて、夕日が沈み掛かって、かっ日照るような、悲哀を帯びて爽快な処がある。まあ、年増の美人のようなものだね。こんな日に、鼯鼠のようになって、内に引っ込んで、本を読んでいるのは、世界は広いが、先ず君位なものだろう。それでも机の上に俯さつていなかっただけを、僕は褒めて置くね。」

秀磨は真面目ではあるが、厭がりもしないらしい顔をして、盛んに饒舌り立てている綾小路の様子を見ている。簡単に言えば、この男には餓鬼大将と云う表情がある。額際から顛頂へ掛けて、少し長めに刈った髪を真っ直に背後へ向けて掻き上げたのが、日本画にかく野猪の毛のように逆立っている。細い目のちよいと下がった目尻に、嘲笑的な微笑を湛えて、幅広く広げた口を囲むように、左右の頬に大きい括弧に似た、深い皺を寄せている。

綾小路はまだ饒舌る。「そんなに僕の顔ばかり見給うな。心中大いに僕を軽侮しているのだろう。好いじゃないか。君が口アで、僕がブツフォンか。ドイツ語でホオフナルと云うのだ。陛下の倡優を以て遇する所か。」



秀麿は覚えず噴き出した。「僕がそんな侮辱的な考をするものか。」

「そんなら頭からけんつくなんぞを食わせないが好い。」

「うん。僕が悪かった。」秀麿は葉巻の箱の蓋を開けて勧めながら、ひとりごと 独語のようにつぶやいた。「僕は人の空想に毒を注ぎ込むように感じるものだから。」

「それがサンチマンタルなのだよ」と云いながら、綾小路は葉巻を取った。秀麿はマツチを摩すった。

「メルシイ」と云つて綾小路が吸い附けた。

「暖かい所が好かろう」と云つて、秀麿は椅子を一つ煖炉の前に押し遣てった。

綾小路は椅背きはいに手を掛けたが、すぐに据わらずに、あたりを見廻てして、卓テエブルの上へにゆうべから開けたままになつてゐる、厚い、仮綴かりとじの洋書に目を着けた。傍かたわらには幅へらの広い籠へらのような形をした、鼈べっこう甲こうの紙切かみきり小刀こがたなが置いてある。「又何か大きな物にかじり附いてゐるね。」こう云つて秀麿の顔を見ながら、腰を卸した。

綾小路は学習院を秀麿と同期で通過した男である。秀麿は大学に行くのに、綾小路は画かきになると云つて、溜池ためいけの洋画研究所へ通い始めた。それから秀麿がまだ文科にいるうちに、綾小路は先へ洋行して、パリイにいた。秀麿がマルセイユから上陸して、ベルリンへ行く途中で、二三日パリイに滞在していた時には、親切に世話を焼いて、シャン・ゼリゼエの散歩やら、テアアトル・フランセエとジムナズ・ドラマチックとの芝居見物やら、時間を吝おしまずに案内をして歩いて、ベルリンへ行つてから著きる服まで誂あつちえさせてくれた。

綾小路は目と耳とばかりで生活しているような男で、芸術をさえ余り真面目には取り扱っていないが、明敏な頭脳がいつも何物にか饑うえている。それで故郷へ帰つて以来引き籠り勝かちにしている秀麿の方からは、尋ねても行かぬのに、折々遊びに来て、秀麿の読んでいゝ本の話わを、口ではちやかしながら、真面目に聞いて考えても見るのである。

綾小路は卓の所へ歩いて行つて、開けてある本の表紙を引つ繰り返して見た。「ジイ・フィロゾフイイ・デス・アルス・オツプか。妙な標題だなあ。」

そこへ雪が橢円形だえんけいのニツケル盆こに香茶こうちやの道具を載せて持つて来た。そして小さい卓を煖炉の前へ運んで、その上に盆を置いて、綾小路の方を見ぬようにしてちよいと見て、

そつと部屋を出て行つた。何か言われはしないだろうか。言えば又恥かしいような事を言うだろう。どんな事を言うだろう。言わせて聞いても見たいと云うような心持で雪はいたが、こん度は綾小路が黙つていた。

秀麿は伏せてあるタツスを起して茶を注いだ。そして「牛乳を入れるのだろうな」と云つて、綾小路を顧みた。

「こないだのように沢山入れないでくれ給え。一体アルス・オップとはなんだい。」こう云いながら、綾小路は煖炉の前の椅子に掛けた。

「コム・シイさ。かのようにとでも云つたら好いのだろう。妙な所を押さえて、考を押し広めて行つたものだが、不思議に僕の立場そのままを説明してくれるようで、愉快でたまらないから、とうとうゆうべは三時まで読んでいた。」

「三時まで。」綾小路は目を睜みはつた。「どうして、どこが君の立場そのままなのだ。」

「そう」と云つて、秀麿は暫く考えていた。千ペエジ近い本を六七分通り読んだのだから、どんな風に要点を撮つまんで話したものかと考えたのである。「先ず本当だと云う詞ことばからして考えて掛からなくてはならないね。裁判所で証拠立てをして拵こしらえた判決文を事実だと云つて、それを本当だとするのが、普通の意味の本当だろう。ところが、そう云う意味の事実

と云うものは存在しない。事実だと云つても、人間の写象を通過した以上は、物質論者のランゲの謂う湊そうごう合ごうが加わっている。意識せずに詩にしている。嘘うそになっている。そこで今一つの意味の本当と云うものを立てなくてはならなくなる。小説は事実を本当とする意味に於おいては嘘だ。しかしこれは最初から事実がらなないで、嘘と意識して作つて、通用させている。そしてその中うちに性命がある。価値がある。尊い神話も同じように出て、通用して来たのだが、あれは最初事実がただけ違う。君のかく画も、どれ程写生したところで、実物ではない。嘘の積りでかいている。人生の性命あり、価値あるものは、皆この意識した嘘だ。第二の意味の本当はこれより外には求められない。こう云う風に本当を二つに見ることは、カントが元祖で、近頃プラグマチスムなんぞで、余程卑俗にして繰り返しているのも同じ事だ。これだけの事は一寸ちよつと云つて置かなくては、話が出来ないのだがね。

「宜よろしい。詞はどうでも好い。その位な事は僕にも分かつている。僕のかく画だつて、実物ではないが、今年も展覧会で一枚売れたから、慥たしかに多少の価値がある。だから僕の画を本当だとするには、異議はない。そこでコム・シイはどうなるのだ。」

「まあ待ち給え。そこで人間のあらゆる智識、あらゆる学問の根本を調べてみるのだね。」

一番正確だとしてある数学方面で、点だの線だのと云うものがある。どんなに細かくぼつんと打ったって点にはならない。どんなに細くすうつと引いたって線にはならない。どんなに好く削った板の縁ふちも線にはなっていない。角かども点にはなっていない。点と線は存在しない。例の意識した嘘だ。しかし点と線があるかのように考えなくては、幾何学は成り立たない。あるかのようにだね。コム・シイだね。自然科学はどうだ。物質と云うものでか  
 らが存在はしない。物質が元子から組み立てられていると云う。その元子も存在はしない。しかし物質があつて、元子から組み立てられているかのように考えなくては、元子量の勘定が出来ないから、化学は成り立たない。精神学の方面はどうだ。自由だの、靈魂不滅だの、義務だのは存在しない。その無いものを有るかのように考えなくては、倫理は成り立たない。理想と云っているものはそれだ。法律の自由意志と云うものの存在しないのも、疾とつとくに分かつている。しかし自由意志があるかのように考えなくては、刑法が全部無意味になる。どんな哲学者も、近世になつては大低世界を相そつたい待たいに見て、絶ぜつ待たいの存在しないことを認めてはいるが、それでも絶待があるかのように考えている。宗教でも、もうだいたい古くシユライエルマツヘルが神を父であるかのように考えると云っている。孔子こうしもずっと古く祭るに在いますが如くすと云っている。先祖の靈があるかのように祭るのだ。そうして見

ると、人間の智識、学問はさて置き、宗教でもなんでも、その根本を調べて見ると、事実として証拠立てられない或る物を建こんりゆう立りゆうしている。即ちかのようにが土台に横よこたわつてゐるのだね。」

「まあ一寸待つてくれ給え。君は僕の事を饒舌しゃべる饒舌しゃべると云うが、君が饒舌しゃべり出して来ると、駆足になるから、附いて行かれない。その、かのようにと云う怪物の正体も、少し見え掛つては来たが、まあ、茶でももう一杯飲んで考えて見なくては、はつきりしないね。」

「もうぬるくなつただろう。」

「なに。好いよ。雪と云う、証拠立てられる事実が間はへ這はい入つて来ると、考えがこんがらかつて来るからね。そうすると、つまり事実と事実がごろごろ転がっていてもしようがない。それを結び附けて考えようとすると、厭いやでも或る物を土台にしなくてはならない。その土台が例のかのようにだと云うのだね。宜しい。ところが、僕はそんな怪物の事は考えずに置く。考えても言わずに置く。」綾小路は生なまぬ温ぬい香茶をぐつと飲んで、決然と言いつつ放つた。

秀麿は顔を蹙しかめた。「それは僕も言わずにいる。しかし君は画だけかいて、言わずにいられようが、僕は言う為めに学問をしたのだ。考えずには無論いられない。考えてそれを

真直ぐに言わずにいるには、黙ってしまいか、別に嘘を拵こしらえて言わなくてはならない。それでは僕の立場がなくなってしまうのだ。」

「しかしね、君、その君が言う為めに学問したと云うのは、歴史を書くことだろう。僕が画をかくように、怪物が土台になっても好いから、構わずにずんずん書けば好いじゃないか。」

「そうはいかないよ。書き始めるには、どうしても神話を別にしなくてはならないのだ。別にする、なぜ別にする、なぜごちやごちやにして置かないかと云う疑問が起る。どうしても歴史は、画のように一刹那とらを捉えて遣っているわけにはいかないのだ。」

「それでは僕のかく画には怪物が隠れているから好い。君の書く歴史には怪物が現れて来るからいけないと云うのだね。」

「まあ、そうだ。」

「意気地がないねえ。現れたら、どうなるのだ。」

「危険思想だと云われる。それも世間がかれこれ云うだけなら、奮闘しよう。第一父が承知しないだろうと思うのだ。」

「いよいよ意気地がないねえ。そんな葛藤かつとうなら、僕はもう疾とづくに解決してしまってい

る。僕は画かきになる時、親爺おやじが見限つてしまつて、現に高等遊民として取扱つてゐるのだ。君は歴史家になると云うのをお父うさんが喜んで承知した。そこで大学も卒業した。洋行も僕のように無理をしないで、気楽にした。君は今まで葛藤の繰延くりのべをしていたのだ。僕の五六年前に解決した事を、君は今解決して、好きなように歴史を書くが好いじゃないか。己やむを得んじやないか。」

「しかし僕はそんな葛藤を起さずに遣つていかれる筈だと思つてゐる。平和な解決がつい目の前に見えている。手に取られるように見えている。それを下手へたに手に取ろうとして失敗をすることなんぞは、避けたいと思つてゐる。それでぐずぐずしてゐて、君にまで意気地がないと云われるのだ。」秀磨は溜息ためいきを衝いた。

「ふん、どうしてお父うさんを納得させようと云うのだ。」

「僕の思想が危険思想でもなんでもないと云うことを言つて聞せさせれば好いのだが。」  
「どう言つて聞せるね。僕がお父うさんだと思つて、そこで一つ言つて見給え。」

「困るなあ」と云つて、秀磨は立つて、室内をあちこち歩き出した。

ひかけ  
はもうヴェランダの檐のきを越して、屋根の上に移つてしまつた。真まつ蒼さおに澄み切つた、まだ秋らしい空の色がヴェランダの硝子戸を青せしぎよく玉のように染めたのが、窓越しに少し



翳<sup>かす</sup>んで見えている。山の手の日曜日の寂しさが、だいぶ広いこの邸やしきの庭に、田舎の別荘めいた感じを与える。突然自動車が一台煉瓦れんが塀べいの外をけたたましく過ぎて、跡は又元の寂しさに戻った。

秀麿は語を続<sup>つ</sup>いだ。「まあ、こうだ。君がさつきから怪物々と云っている、その、かのようにだがね。あれは決して怪物ではない。かのようにがなくては、学問もなければ、芸術もない、宗教もない。人生のあらゆる価値のあるものは、かのようにを中心かにしてい<sup>る</sup>。昔の人が人格のある単数の神や、複数の神の存在を信じて、その前に頭かを屈めたように、僕はかのようにの前に敬けい度けんに頭を屈める。その尊敬の情は熱烈ではないが、澄み切った、純潔な感情なのだ。道徳だつてそうだ。義務が事実として証拠立してられるものでないと云うことだけ分かつて、怪物扱い、幽霊扱いにするイブセンの芝居なんぞを見る度に、僕は憤懣ふんまんに堪えない。破壊は免るべからざる破壊かも知れない。しかしその跡には果してなんにもないのか。手に取られない、微かすかなような外観のものではあるが、底にはかのように儼乎げんことして存立している。人間は飽くまでも義務があるかのように行わなくてはならない。僕はそう行つて行く積りだ。人間が猿から出来たと云うのは、あれは事実問題で、事実として証明しようと掛かっているのだから、ヒポテジスであつて、かのようにで

はないが、進化の根本思想はやはりかのようにだ。生類は進化するかのようにしか考えられない。僕は人間の前途に光明を見て進んで行く。祖先の霊があるかのように背後を顧みて、祖先崇拜をして、義務があるかのように、徳義の道を踏んで、前途に光明を見て進んで行く。そうして見れば、僕は事実上極蒙昧な、極従順な、山の中の百姓と、なんの扱ふ所もない。只頭がぼんやりしていないだけだ。極頑固な、極篤実な、敬神家や道学先生と、なんの扱ふところもない。只頭がごつごつしていないだけだ。ねえ、君、この位安全な、危険でない思想はないじゃないか。神が事実でない。義務が事実でない。これはどうしても今日になって認めずにはいられないが、それを認めたのを手柄にして、神を洗す。義務を蹂躪する。そこに危険は始めて生じる。行為は勿論、思想まで、そう云う危険な事は十分撲滅しようとするが好い。しかしそんな奴の出て来たのを見て、天国を信ずる昔に戻そう、地球が動かずについて、太陽が巡回していると思う昔に戻そうとしたって、それは不可能だ。そうするには大学も何も潰してしまつて、世間をくら闇にしなくてはならない。黔首を愚にしなくてはならない。それは不可能だ。どうしても、かのようにを尊敬する、僕の立場より外に、立場はない。」

これまで例の口の端の括弧を二重三重にして、妙な微笑を顔に湛えて、葉巻の烟を吹き

ながら聞いていた綾小路は、煙草の灰を灰皿に叩き落して、身を起しながら、「駄目だ」と、簡単に一言云つて、煖炉を背にして立った。そしてめまぐるしく歩き廻りながら饒舌つている秀磨を、冷やかに見ている。

秀磨は綾小路の正面に立ち止まつて相手の顔を見詰めた。蒼い顔の目の縁がぼつと赤くなつて、その目の奥にはフアナチスムの火に似た、一種の光がある。「なぜ。なぜ駄目だ。」

「なぜつて知れているじゃないか。人に君のような考になれと云つたつて、誰がなるものか。百姓はシの字を書いた三角の物を額へ当てて、先祖の幽霊が盆にのこのこ歩いて来ると思つている。道学先生は義務の発電所のようなものが、天の上かどこかにあつて、自分の教わつた師匠がその電氣を取り続いで、自分に掛けてくれて、そのお蔭で自分が生涯ひりぴりと動いているように思つている。みんな手応のあるものを向うに見ているから、崇拜も出来れば、じゆんぼう 遵奉も出来るのだ。人に僕のかいた裸体画を一枚遣つて、女房を持たずにいろ、けしからん所へ往かず<sup>い</sup>にいろ、これを生きた女であるかのように思えと云つたつて、聴くものか。君のかのようにはそれだ。」

「そんなら君はどうしている。幽霊がこのこ歩いて来ると思ふのか。電氣を掛けられて

いると思うのか。」

「そんな事はない。」

「そんならどう思う。」

「どうも思わずにいる。」

「思わずにいられるか。」

「そうさね。まるで思わない事もない。しかしなるだけ思わないようにしている。極めずに置く。画をかくには極めなくても好いからね。」

「そんなら君が仮に僕の地位に立って、歴史を書かなくてはならないとなったら、どうする。」

「僕は歴史を書かなくてはならないような地位には立たない。御免を蒙る。」綾小路の顔からは微笑の影がいつか消えて、平気な、殆ど不愛想な表情になっている。

秀麿は気拔けがしたように、両手を力なく垂れて、こん度は自分が寂しく微笑んだ。

「そうだね。てんでに自分の職業を遣って、そんな問題はそつとして置くのだろう。僕は職業の選びようが悪かった。ぼんやりして遣ったり、嘘を衝いてやれば造做はないが、正直に、真面目に遣ろうとすると、八方塞がりになる職業を、僕は不幸にして選んだのだ。」

綾小路の目は一刹那鋼鉄の様に光った。「八方塞がりになったら、突貫して行く積りで、なぜ遣らない。」

秀磨は又目の縁を赤くした。そして殆ど大人の前に出た子供のような口吻で、声低く云った。「所詮父と妥協して遣る望はあるまいかね。」

「駄目、駄目」と綾小路は云った。

綾小路は背をあぶるように、煖炉に太った体を近づけて、両手を腰のうしろに廻して、少し前屈みになって立ち、秀磨はその二三歩前に、痩せた、しなやかな体を、まだこれから延びようとする今年竹のように、真っ直にして立ち、二人は目と目を見合わせて、良久しく黙っている。山の手の日曜日の寂しさが、二人の周囲を依然支配している。



# 青空文庫情報

底本：「阿部一族・舞姫」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年4月20日発行

1985（昭和60）年5月20日36刷改版

入力：高橋真也

校正：湯地光弘

1999年9月23日公開

2006年4月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# かのように

森鷗外

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>